



審査を終えて

第四十二回展 大会審査部長

加藤 東陽

七月下旬に発生した「令和八年熊本地震」により、お亡くなりになられた方のご冥福をお祈り申し上げます、また、被災された皆様からお見舞いを申し上げます。

第四十二回高円宮杯日本武道館書写書道大展覧会は、全国から毛筆の部一万三千九百八十点、硬筆の部七千七百十二点、合計二万一千六百九十二点の出品がありました。

審査は、六月二十八日、日本武道館第一・第二小道場において、毛筆の部、硬筆の部とも、三十三名の審査委員によって審査の基準を確認し合い、厳正かつ公平に行われました。その結果、高円宮賞に濱田聰雨さん、内閣総理大臣賞に川崎菜々さんをはじめ、各賞を決定いたしました。

受賞された皆様に、心よりお祝い申し上げます。また、毛筆の部、硬筆の部ともに、出品数の増加とともに、作品のレベルも向上しており、上位の賞は決選投票によって決定するなど、今年も皆さんの実力伯仲を強く感じました。

次に、今回の審査に当たって各部の感想を申し上げます。

幼児・小学生の部は、今年も毛筆・硬筆ともに、全国各地からの出品があり、「トメ・ハネ・払い」など、基本点画のしっかりした元氣な姿の作品が多く見られ、心に残りました。また、今年の毛筆では、「希望」や「成長」などの同じ言葉を書いた作品が数多くあり、驚かされました。

中学生の部では、行書作品が大半を占めていましたが、多様な書きぶりが見られ、大変よい傾向にあると思いました。学年が進むに従って、たくさん練習を重ねて筆力が増し、手書きの良さがにじみ出ている作品が多くあり、大変嬉しく思いました。

高校生の部では、「漢字の書・仮名の書」とともに、臨書作品が多い中で、古典に対して、一本の線に自分らしく立ち向かう姿や、自分らしさを追求した作品が多く見られました。特に、二年生、三年生の作品にはレベルの高さが感じられました。次年度は、創作への取り組みを強く望んでいます。

大学・一般の部では、古典の臨書から創作へとステップアップして、表現豊かな作品が増えたことは大変よい傾向であり、嬉しく思いました。出品することによって、自己の高揚感、独創性がより一層発揮されます。更に高度な作品に出会えることを期待いたします。

今年も高齢者では、九十五歳を筆頭に五十四名、外国（日本在住の外国籍の方を含む）からは百七十三名、特別支援学校等からは十九名の出品がありました。それぞれに自分の心の表出と筆を一体化させる真摯な姿に、大変心打たれました。

今年の十二月頃には、書道のユネスコ無形文化遺産への登録が注目されています。本展覧会が文字文化を大切にして、更に充実発展して参りますよう、皆様の更なるご支援とご協力をお願いし、講評といたします。